

テーマ別研究発表 | スポーツ文化研究部会：【課題B】継承されてきたスポーツ文化を問い直す

📅 2025年8月28日(木) 13:50 ~ 14:30 📍 1302教室(教育研究棟 1街区 3階 1302)

[2a1704-05] スポーツ文化研究部会【課題B】口頭発表⑤

座長:榎本 雅之(滋賀大学)

13:50 ~ 14:10

[スポーツ文化-B-13]

学校における東京2020大会の”Post Games Legacy”の検討 (教)

大会後3年間のオリ・パラ教育継続調査から

*宮崎 明世¹ (1. 筑波大学)

14:10 ~ 14:30

[スポーツ文化-B-14]

ピエール・ド・クーベルタンによる「スポーツと平和」思想の原点 (史)

*和田 浩一¹ (1. 神戸医療未来大学)

テーマ別研究発表 | スポーツ文化研究部会：【課題B】継承されてきたスポーツ文化を問い直す

📅 2025年8月28日(木) 13:50 ~ 14:30 📍 1302教室(教育研究棟 1街区 3階 1302)

[2a1704-05] スポーツ文化研究部会 【課題B】 口頭発表⑤

座長:榎本 雅之(滋賀大学)

13:50 ~ 14:10

**[スポーツ文化-B-13] 学校における東京2020大会の”Post Games Legacy”の検討
(教)**

大会後3年間のオリ・パラ教育継続調査から

*宮崎 明世¹ (1. 筑波大学)

東京2020大会に向けて全国各地で展開されたオリンピック・パラリンピック教育の大会後の継続状況と、活動内容、必要とされる支援等について、これまで2年にわたり本学会で報告してきた。各国で過去に行われたオリ・パラ教育について、大会後の継続や学校教育への定着に関する研究はほとんど行われていない。大会のレガシーとして何が残されたのか（Post Games Legacy）を明らかにすることには意義があり、そのためには継続的な調査が必要である。本研究では大会終了後3年間継続して実施している調査から、大会後の学校におけるオリ・パラ教育活動の実態を明らかにし、大会のレガシーを検討することを目的とした。2024年度は5つの自治体を対象としたが、昨年度から継続して対象とした4自治体のうち3つで回答校数が増加し、2つについては大幅に増加した。2024年夏にパリ大会が開催されたことから、教員や児童生徒の関心が高まったものと考えられる。昨年度までの調査から、大会の終了後、時間を追ってオリ・パラ教育の実施率は低下していたが、今年度は4割強～6割と向上した。パリ大会が開催されたことに加えて、大会後に自治体が主体となってアスリート派遣やスポーツ教室等が行われている自治体があり、それが定着していることが示された。教育活動を実施しない理由としては、これまでと同様、時間の確保が困難であること、教育課程に位置付けられていないことが多く挙げられた。具体的な展開の機会として、教科教育が6～7割と最も多く、学校行事の活用は1割前後と低かったが、福祉・人権教育などの題材としては高い割合で活用されていた。大会終了後一定の時間が経過しても、学校教育の様々な場面でオリ・パラ教育が定着していることが明らかとなった。

テーマ別研究発表 | スポーツ文化研究部会：【課題B】継承されてきたスポーツ文化を問い直す

📅 2025年8月28日(木) 13:50 ~ 14:30 📍 1302教室(教育研究棟 1街区 3階 1302)

[2a1704-05] スポーツ文化研究部会【課題B】口頭発表⑤

座長:榎本 雅之(滋賀大学)

14:10 ~ 14:30

[スポーツ文化-B-14] ピエール・ド・クーベルタンによる「スポーツと平和」思想の原点 (史)*和田 浩一¹ (1. 神戸医療未来大学)

「スポーツと平和」の源流は、近代オリンピックの制度を創出したピエール・ド・クーベルタン（1863-1937年）の思想にさかのぼる。本発表では、平和に関するクーベルタンの初の論考である「平和への教育」を取り上げ、彼がスポーツと教育と平和を結びつけるに至った背景とその内容とをQuanz（1994年）に学びながら明らかにする。「平和への教育」は、社会経済学会発行の『社会改革』1889年9月号で発表された小論である。1889年は6月にパリで列国議会同盟が設立されるなど、組織的な国際平和運動の起点となった年である。この小論には、列国議会同盟設立の会議で示されたという、学校の中で生じた争いを自分たち自身で解決するという仕組みの教育現場への導入が紹介されている。クーベルタンはこの平和教育の一つのモデルを、パブリック・スクールのスポーツ活動の中に見ていた。例えば、イギリスではボクシング・グローブが「平和の番人」と呼ばれ、ボクシングが子どもたちに「より長続きする確かな平和をもたらす」と述べている。イギリスの教育についてのさらなる指摘は、クーベルタンが「うってつけの審判」と形容するキャプテンの存在である。年齢や日々の行い、スポーツ競技における力と巧みさの点で仲間の長となったキャプテンは、重みのある言葉や絶対的な権威により喧嘩をしずめ、仲間を驚かせるような賢さを示すと説明されている。クーベルタンは「平和への教育」の冒頭で、戦争仲裁の枠組みを作ろうとする列国議会同盟の目標を高く評価している。少年たちの社会におけるキャプテンの役割（うってつけの審判）は、まさに争いの仲裁である。この同じ構図が、スポーツ（オリンピック）が「全世界の平和を確保する、間接的にはあるが有力な一要因となる」（1896年）という、クーベルタンによるスポーツと平和に関する思想につながっている。